

熊本県立荒尾支援学校進路便り No. 63

わーく&らいふ

令和3年度 第2号 6月2日 発行

■CONTENTS■

【特集】高等部一般学級「現場実習」

■特集 高等部一般学級「現場実習」～実習の意義～

高等部一般学級ではまもなく「現場実習」が始まります。現場実習とは文字通り、学校外の様々な「現場」で、2週間に及ぶ「実習」をするもので、高等部卒業後の「進路」を決めるために非常に重要な学習です。今回のわーく&らいふでは、この学習のねらいについて解説します。

①進路希望に応じた「ちょうどよい」体験により、将来に向けたよいイメージを育む。

現場実習先は「三者面談」で話し合った「進路希望」に沿って決まりますが、重要なキーワードは、生徒の実態に「ちょうどよい」場所であることです。

実習内容が「難しすぎ」でも「簡単すぎ」でも、卒業後の社会参加に向けた意欲を高めることは出来ません。そこで「ちょうどよい」が重要なのです。

1年次の現場実習先は、一般就労（一般の会社などで雇用契約を結んではたらくこと）希望者であっても全員、福祉就労（福祉施設で福祉サービスを受けながらはたらくこと）から始めます。

②進路に関する情報を集める。（保護者）

ご家族にとってみますと現場実習は、お子様の実習を通して進路のことを具体的に知る重要な機会です。

進路決定に向けた情報収集の機会としては「百聞は一見にしかず」ご家族の実習参観がおすすめです。



③将来の生活をリハーサルし、これから必要なことを確認する。

2週間の実習期間は「将来の生活（24時間）をリハーサルする場」と考えると分かりやすく、実習中の家庭生活もまた「現場実習」だと考えてください。お子様の疲れ具合や気分の安定状況から、実習先での生活の負担度がわかります。負担度に応じて、例えば「10時までには就寝する」や「疲労回復のため毎日入浴する習慣をつける」「日曜日の外出を見合わせる」「気分転換に散歩をする」など、将来に向けた貴重な実践ができますし、負担が大きすぎると考えられる場合には、進路希望の再考も必要となります。

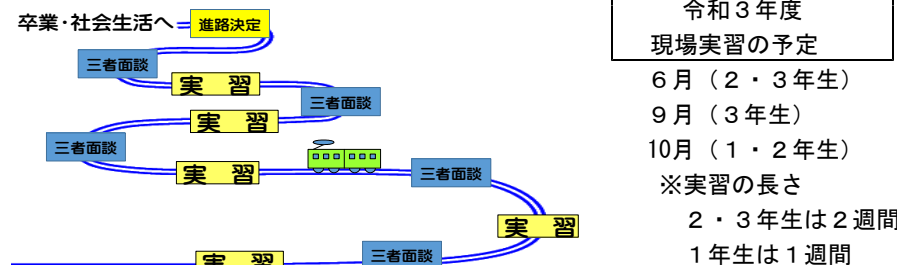
④生徒の現在の力を客観的に評価する。

生徒の社会参加に向けた実力や段階は、実習先から客観的にチェック（評価）していただきます。ときには耳の痛い評価をいただく場合もありますが、実習後の三者面談で、進路希望に向けて「どんな力が必要か」「何をのぼすか」「家庭と学校でどんな協力をするか」など、生徒の進路実現に向けて、ポジティブに考えていくことが大切です。

⑤就職活動～ぴったりの進路とのマッチング～

3年次になると「現場実習」は、進路決定に向けたいわゆる「就活」の側面が強くなり、厳しい現実に出会うこともあります。つまり「行きたくても行けない（サービスの対象者ではない、選ばれない）」ことがあるということです。

「現場実習」は下の図のように卒業までに5回計画があります。実習後には必ず実習の反省会としての「三者面談」がありますので、2年次までには、お子様にぴったりの進路を担任と話し合ってください。



□編集後記□

コロナ禍の現場実習には様々な逆風があります。今回の実習直前に4件の受け入れ辞退があり5人の生徒の実習が延期になりました。また「マスク着用が条件」や「（家族も含めて）37度超の発熱で実習停止」など、特別支援学校の生徒たちにも、「通常の感染予防」スキルを十分教えることが不可欠です。お子様が小さいうちから「マスク」「検温」慣れおきたいものですね。

さて、「障害基礎年金」に関するオンライン研修があります。（裏面参照）年金問題は、家族にとって知っておきたい情報のひとつです。ぜひ学んでみてください。

（文責：谷口）